

早稲田大学 高等学院中学部
2023 年度 入試問題の訂正内容

<高等学院中学部 一般入試>

【国語】

●問題冊子 13 ページ：設問 二 問一

一b「ぶき」、一d「お」

当該箇所の設問につきましては、解答の有無・内容にかかわらず、受験生全員に得点を与えることといたします。

以上

国 語

(問 題)

2023年度

〈R05142064〉

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子および解答用紙には手をふれないでください。
2. 問題は3～17ページに書かれています。本文は二段になっています。試験中に問題冊子の印刷が見にくい、ページがぬけている、解答用紙のよれなどに気づいた場合は、手をあげて監督員に知らせてください。
3. 解答はすべて指定された場所に、HBあるいはBの黒の鉛筆またはシャープペンシルで正しいに記入してください。
4. 解答用紙記入上の注意
- (1) 解答用紙の指定された場所(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に正しいに記入してください。
- (2) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。
- (3) 受験番号は右づめで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないでください。
- (4) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答してください。
- (5) 解答の際は、「」や「」も一字と数えます。
5. 解答はすべて指定された解答らんに入してください。指定された解答らん以外に何かを記入した解答用紙は、採点しない場合があります。
6. 問題冊子の余白などは利用してかまいませんが、どのページも切り離さないでください。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにしてください。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出してください。
9. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

近年のITが推進するのは、自分のことなどわからなくてよいという方向です。動画サービスなどで、リコメンドが自動的に表示されるのもその一環いつかんでしょう。何かを選ぶ際に、自分の好みを考慮する必要はありません。ただリコメンドに従えばよいのです。それで好みにあったコンテンツが提案されます。

ITがもたらすあらゆる「スマート」なものが、同種の傾向を持ちます。それらは大きな手間を削減すると共に、そうした手間をかけることでしか得られなかった自分自身についての知見を隠蔽いんぺいし、過去の行動からの逸脱いつだつや冒険ぼうけんを抑制よくせいします。なにしろビッグデータは、「行動したこと」の結果は記録しますが、そこに立ち現れなかったさまざまな思惟※しいのけいりや感情、そしてそこにこめられた意志は一つ残らず見落とすのです。「そうであろうとしたこと」や「そうであったかもしれないもの」は、何一つ記録に残りません。しかし、考えてみてください。何度もやろうとして、何度も失敗し、しかしそれでもやろうとする行動があるとするならば、それは自分について何かを明らかにするのではないでしょう。貪欲どんよくなビッグデータは、しかしそうしたものに興味を持ちません。彼らが視線を向け、必死にむさぼり続けるのは立ち現れた行動という結果だけであり、どれだけ情報が集まっても、ビッグデータが「あなたはだれなのか」を知ることはありません。総体としての「自分」はそこには

ないのです。

ITのリコメンドだけが問題なのではありません。消費をうながす広告と、アクセスかせぎのために過剰かじょうに味つけされたさまざまなコンテンツも問題です。そうしたコンテンツに囲まれ、まるで呼吸をするかのようにその情報を摂取せつしゆしていると、「自分」という存在に注意を向けることはなくなります。何かを思うにしても、常に「今」の自分が中心であり、総体としての「自分」は蚊帳かやの外に置き去りにされます。過去がどうであったのか、あるいはこれからの未来をどう設計していくかには注意は向けられず、注目のトピックやトレンドの話題ばかりが頭をしめるのです。むしろ、それで自分の理解が深まるわけはありません。

ノートを書くことは、そうした状況を変えます。自分の注意の矛盾※を、変化させられるのです。

では、ノートをコツコツ書いていけば、いつかは自己実現がかなうのかというと、そういうわけでもありません。総体としての「自分」を確認し、防波堤ぼうはていをきずいたとしても、未来を直接「つくれない」ことには変わりありません。だとしたら、ノートを書くことにはどんな意味があるのでしょうか。

それはわかりません。

別にふざけているわけではないのです。「今」書いているノート

の価値は、「今」はわからないのです。もう少し言えば、わからないというよりも不確定と言った方が正確でしょうか。ノートを書くことが役立つのは「今」だけでなく、時間がたった後で思いも寄らぬ形で役立つこともあります。すなわち、記録の 3 があるのです。「〴〵のために」と書き残したものが、ぜんぜん別のことに役立つことがある——書き留められた情報が持つ可能性とはそのようなものです。今の自分がもはややっていることを整理するため書いた文章が、三年後の自分が将来の指針を決める際のヒントになる。そんなことがいくらかでも起こります。

「それを書いた時点では、思いも寄らなかつた結果を引き寄せること」。てつがくしや あすまひろき ※ 哲学者の東浩紀さんはジャック・デリダの哲学を引きつぎながらそれを「誤配」と呼んでいます。誤配には良い結果も悪い結果もありますが、どちらにせよ「自分」には思いもつかなかつた結果を呼び寄せます。自分の思いをこえていくのです。その意味で、ノートを書くことは自分の人生に誤配を生じさせることだと言えるでしょう。

④ 文章を書くことがテレパシーであるからこそ、コミュニケーションで誤配が起こります。「意外な読まれ方」「予想外の使われ方」が生じるのです。もしそれが以心伝心であり、「思ったこと」がそのまま相手の心書きこまれるなら、誤配など起こりようがありません。「思ったこと」がそのまま伝わって、それ以上の出来事できごとは生じないままcが閉じます。まるでアルゴリズムのようです。

書き手が読み手のことを考えて文章を書き、読み手が書き手のことを考えてその文章を読む、というふくdぎつなステップをふむとき、そこに誤配が生じる余地が生まれます。情報の新しい価値は、そうした余地がないところには生じません。直接的な支配が可能な場所では、逸脱は生じないのです。

文章を書くことがテレパシーだからこそ、つまりそれが直接ではなく間接だからこそ、書かれた情報は「自分の思い」の外に出られるようになります。「こういう意味である」「こういう風に利用される」「こういう風に受け取られる」という自分の想定を、たやすくこえていくのです。

それが間接的なものの力です。直接的なものでは、絶対に起こり得ない魔法まほうが、ここには宿ります。

では、そうした誤配を呼びこむために大切なことは何でしょうか。それは「未来のことを考える」姿勢です。

一見すると、未来は予測できないのだから、何かを考えてもむだであるという結論が出てくるように思えます。しかし、考えてみてください。いくら文章が読む人に依存いそんしているからといって、何も考えずに文章を書けばよい、という結論になるでしょうか。自分が読んでも支離滅裂しりめつれつな文章を書いて、「適当に解釈かいしゃくしてください」と放置しておけば、それだけで予想外の結果が訪れると期待するのはさすがに虫がよすぎます。たとえ理解できなくても、支配できなく⑥ても、読者のことを考える姿勢は欠かせません。

未来についても同じことが言えます。未来が完全に自分でコントロールできないからこそ、未来について「考える」行為が大切になります。単に「思う」のではなく、さまざまに「考える」のです。そして、どれだけ考えても未来を完全に理解できるわけではないとさともまた、未来について考える行為の重要な点です。

自分が思えばくビジョンをノートに書き出し、それがあくまでビジョン（理想・幻想）^{げんそう}でしかないと割り切った上で、さまざまな角度から検討してみましよう。あるいは時間を置いて読み返してみましよう。「夢を語る」ことの重要性はよく説かれますが、「夢を推敲する」ことの重要さは説かれません。まるで初志貫徹がこの上ない美徳だと言わんばかりの態度です。しかし、ビジョンもまた人が抱くものである以上、誤解や無知やバイアスがひそんでいます。自分のやりたいことと、それを表すための表現がマッチしていないこともあります。だから、自分がえがき出したビジョンについても何度も読み返し、書き直すのです。

ノートというツールはそのために活躍します。ただ「思う」だけでなく、思ったことについて「考える」ためのツールなのです。ノートに「書き留める」と、「書きかえ」られるようになります。

それは「上書き」、つまりかつての事象をすべて「なかったこと」にするのではなく、一つの変化として、あるいは一つのプロセスとして「書き直す」ことを意味します。過去からの矢印を引き受けた上で、新しく矢印を設定する。そのような行いなのです。

書いたものは、何度でも書き直せばいいのです。考え直していけばいいのです。一度そう「思った」のだから、後はその通りにやり続ける、という頑固なアプローチではなく、たびたび足を止めて考え直すことをしていけばいいのです。それを可能にするのがノートです。

（倉下忠憲『すべてはノートからはじまる』より・一部改）

※リコメンド……視聴者などの好みに応じて提供される情報。

※コンテンツ……動画などの情報。

※思惟……心に深く考え思ふこと。

※トレンド……流行。

※ジャック・デリダ……フランスの哲学者。

※推敲……文章を作る際にその字句や表現をよく練り直すこと。

※バイアス……かたよった見方。

問一 — a 「けいろ」 ・ — b 「きず」 ・ — c 「まく」 ・ — d 「ふくざつ」 を、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 — ① 「総体としての「自分」はそこにはない」とありますが、筆者はどのように考えていますか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「自分」を形作るのは過程であり結果は無意味だ。

イ 「自分」とは客観的な記録を集めたものではない。

ウ 現代における「自分」のあり方は変化しつつある。

エ 過去の考え方を書き残せば「自分」を理解できる。

問三 — ② 「そうした状況」とありますが、人々がどのような状況に落ちっていると筆者は考えていますか。「という状況。」につながるように本文中から十五字で抜き出して答えなさい。

問四 3 にあてはまる語として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 虚構性
きようこう

イ 万能性
ばんのう

ウ 硬直性
こうちよく

エ 越境性
えつきやう

問五 — ④ 「文章を書くことがテレパシーである」とありますが、ここで言われている「テレパシー」とは文章のどのような特性を表していますか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 言葉にこめられた書き手の意図を読み手が想像する必要がある。

イ 注意深く文章を読むことによって書き手の考えが正確にわかる。

ウ 書き手が工夫をこらすことで意図が過不足なく読み手に伝わる。

エ 空間的に離れた者同士がお互いの考えを理解することができる。

問六 — ⑤ 「アルゴリズム」とありますが、どのような意味で使われていますか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 感覚を共有するための工夫。

イ 現代的かつ機能的な思考法。

ウ 一定の規則に基づいた手順。

エ 高速で思考を伝達する方法。

問七 — ⑥ 「虫がよすぎます」とありますが、次にあげるのは「虫」という語を用いた慣用句です。それぞれ示した意味に合うように、

A . B
に入る語を、すべてひらがなで答えなさい。

・ 虫の A

特に理由はないが、何か悪いことが起きそうだと予感すること。

・ 虫の B

弱り果てて、今にも死にそうな状態。

問八 — ⑦ 「読者のことを考える姿勢は欠かせません」とありますが、なぜですか。理由として適切でないものを一つ選び、記号で答えな

さい。

ア 相手に伝わるように書こうとすることで、自分の考えがより深まるから。

イ 書き手が一生懸命であればあるほど、その熱意が読者の心に伝わるから。

ウ 読者のことを何も考えずに書くと、自分でも理解不能なものになるから。

エ そもそも読者が全く理解できなければ、予想外な結果も生まれないから。

問九 — ⑧ 「それを可能にするのがノートです」とありますが、「それ」とはどのようなことを指していますか。本文全体をふまえて四十

六字以上六十字以内で説明しなさい。

問十 本文の書かれ方についての説明として適切でないものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者の考えを用いることで説得力を持たせている。

イ ノートの書き方について具体的に説明されている。

ウ 現代的な問題点をふまえたうえで論を進めている。

エ 読者に対する問いかけがくり返し用いられている。

オ 筆者の体験を示すことで理解しやすくなっている。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

蜂が一匹舞いこんだ。黄褐色の腹部のふくれ上がった拇指程もある大きさの蜂で、これに刺されたら大人でも涙をこぼさなければならぬ程痛いだろうと思われる。

発車を二十分後にひかえたバスの中だった。まだ早過ぎるのか、バスの中に席をしめているのは、私が一人だった。

足の前にずい分軽くなったりリュックを置いて私は蜂の飛翔をじっと見つめていた。その時私の心に恐怖の感情が動いていたことを否定出来ない。幼いころ大きな蜂に首筋を刺された恐ろしい記憶が今に至るまで私の心に残っていた。蜂はそんな私の心の動きとはお構いなしに、ぶんぶんと同様なうなりを立てて車内を飛び回っていた。私は恐怖のまなざしをその飛翔の成り行きに固定させたままなす術をも知らない。やがて蜂は旋回①の中心を私の頭上に持って来た。幾重にも輪をえがいて飛び回る。まるで私の幼児的な恐怖を見透かし私をもてあそぶような飛び方だった。

男女の二人連れが乗車口に現れ車内に加わった時、私は待ちに待った味方を得たような安堵の気持ちを味わった。私の喜びは少しおもむきを変えて実際に報いられた。というのは退散はせずに蜂が旋回の私からその男女の二人連れに移したからである。危険は私から去った。だが依然と存在はしたのである。

二人連れは乗車口のすぐ脇の丁度私の真向かいにあたる場所に位

置をしめた。二人共おそろいのボストン・バッグを持っていて、座席に着くや否やすぐに親しげに話し出した。私には聞きとれないような小声で、ほおをすり寄せての話しぶりだった。男の片手が女の片手をとらえている。ごく自然な親密さが二人の周囲にただよっていた。

もしかすると、男はこの女に首つたけなのかも知れなかった。

——くりくりと絶えず動いて回るまるで邪気のない大きな目と、おでこの額と、心もち上向きの鼻の造作が、いかにも彼を人のよさそうな男に見せていた。女の方は、いくらか反歯の口を開けて時々笑いもするが、男とは正反対の芯の強さをその落ち着いた目元にうかがわせていた。余り美しいとはいえないが、ほおにはほお紅を、くちびるには口紅をほんのりとぬって、男に対する愛情のあふれた心の張りが生む一種の魅力をどこなく持っていた。

蜂は旋回の高度をなお一層低空に変えた。——それに気がついた男の瞳は恐怖をうかべているが、まるで蜂の襲来を運命と観じているような受身の態度で、何らかの行動にうったえて蜂を退散させようとする意志のきざしは露程もその瞳からはうかがわれなかった。②人のよい当惑がそのほおを少しゆがませてさえいるようだった。それとは正反対に、女は積極的な防御の態勢をいつの間にかとっていた。ほとんど母性的な本能で女は男のほご者の位置に挺身しようとした。

している健気な風だった。^bぶきとしてその手にいつの間にか日傘の柄がしっかりとにぎられている。

二人は互いに体を一層にじらせ、いつの間にか話し合うのを止めていた。

ついに蜂がその襲撃の前触れを行った。男の肩先に降り立ったのだ。男はとび上がるようにシートから立って、無我夢中でその蜂を手で払いのけた。蜂はしたたかに参ったようだった。復讐の機会を後にゆだねるつもりだろうか、二人の頭上を旋回するのを止め後部の窓ガラスの方へと飛び立った。だが退散したわけではなかった。

再度の襲撃の可能性が依然として残されているわけだった。

男は復讐を恐れていた。平気を装って二言三言女にささやくその態度の中に、おどおどとした落ち着きのなさが隠され切れずに示されていた。それに引きかえ女の瞳は平静と危急の場合の自信の程を物語っていた。男のおびえが彼女の目には子供の恐怖のように他愛なく可愛らしいものに映るのかも知れなかった。もし許されるものなら、いざという場合、男を守るために男をしっかりと彼女の胸にかき抱くことさえも、彼女ならするかも知れなかった。

蜂はやっぱり復讐を忘れなかった。さっきまでの二倍にもあたるうなりをあげて二人を指して飛んで来た。腹部の黄褐色が暗い紫をおびている。二人の頭上に達すると蜂は二人の恐怖の時間を少しでも長びかせようとするかのようにゆっくりと旋回し始めた。まるで絶対者のようなふるまいだった。

迂闊なことに、蜂は彼を殺す瞬間をひそかに待ち構えている女の瞳に気がつかなかったのである。あわせてゆっくりと旋回していたことが蜂にとってどうにもこうにも致命的だった。四回目の旋回の位置が丁度女の真向かいに来た時、女の日傘が正確に蜂に向かって打ち下ろされたのだった。女の腕に狂いはなかった。逃れる術もなく蜂は墜落し床の上にのたうった。

③男は両手で顔をおおった。のたうつ蜂に最後のとどめを刺そうとして床に向かってさし出された女の日傘を目にしたからである。女にとって蜂を殺すことは残酷さを意味しなかった。彼女にとってそれは人間に向かって僭越極まる行動に出た蜂の当然受けなければならぬ仕置きだったし、そうすることが人間の権利であると考えることに、疑念をさしはさむ余地が彼女にとって全くなかったからでもある。彼女は何の躊躇もなしに日傘のどがった先端を、その蜂の腹部にあてることが出来た。もう蜂は羽をばたばたさせることをしなかった。ただかすかに腹を痙攣させるだけだった……

④私は目をつむった。目を開いた時すでに蜂は痙攣に終止符を打たれた一個の死骸と化していた後だった。それは無惨な死骸だった。羽はむしろ腹部と胸部とが別々になっていた。男も、顔をおおっていた両手を払ってその蜂の変わり果てた姿をじっと見つめていたが、やがて見ていることにたえられなくなったのか意を決したように腰をうかして、ズボンのポケットから鼻紙を取り出し、二、三枚を抜きとると、ふるえる手つきで紙を操りうまく蜂の残骸を紙の中に収

めた。それが終わると彼はすばやい動作で紙をまるめ窓の外へぼんと投げた。

もう床には何の痕跡こんせきも認められなかった。男の所作事は男にとってそれが終わるまでの間ずい分つらい仕事のようだったが、その仕事が終わられて男の視界に彼の心を刺激しげきする存在がなくなった時、蜂はもはや彼にとっての関心事ではなくなったのだった。

男の瞳は再びくりくりと動き出してすでに何のかげりもその中にかがわれなかった。女は日傘の柄をすでに離し再び男と何かを語らい始める。二人は至極しごく楽しそうに見えた。彼らにとって時間は現在しかないのかも知れなかった。蜂を殺したという出来事も、今の彼らにとっては、もしかすると何事も起こらなかったということと同一事なのかも知れないのだった。

⑤ 人間の魂たましいの操作はひどく勝手なものである。銃剣じゆうけんで人を突き刺すことと大砲たいほうを発射して人を殺すことと、殺すことに変わりはないはずなのに、人間の心はそれぞれ異なった反応を示す。前者に比して後者の殺人という実感のいかに稀薄きはくなことか。しかも後者だけに例を限ると、殺人という実感の心にもたらされる度合いが大砲の射程距離さやかりに反比例するといった法則が成り立つ始末なのである。

幼稚園ようちえんに通っていた小さなころ、私は動物だけではなく草にも木にも生命があることを教えられた。大人たちはそれを草花を大事にさせる比喩ひゆとして子供の夢にうたえて教えたつもりなのであった。ところがその教えが意外に重大な結果をもたらした。そう教えられ

るちよつと前から一切いっさい私は動物性の食事に手をつけなくなっていた。どうして人間に人間以外の生命をうばう権利があるのか理解出来なくなっていたからである。

私に許された動物性の食事といえば牛乳だけだった。これだけは動物を殺すことによつて購あがなわれるものではないということが、子供である私にも了解出来たからである。それなのに草にも木にも生命があるというのだ。そういえばうつかり私は植物を考慮こうりよに入れなかったのだった。だとすると、私の食べ得るものは牛乳以外にほとんどないのだった。

栄養の豊富なほうれん草※（ポパイの映画によればこれさえ食べれば大人位の大きさになるのはいとも簡単なはずだった）に箸はしをつける時、私はほうれん草の抜かれた時の命の苦しみを連想した。トマトもリンゴも例外ではなかった。キャベツも例外ではなかった。小麦粉さえもが、お米さえもが。花をむしろうとする時私は花の命のさけびを耳にした。生きることが私にとって業苦ごうくに変わったのだった。私には分からなかった。なぜ外の人々がただ易々としてあらゆる生命をうばい去ることが出来るのか。

父も母もただごとではない私の偏執観念X（はんしつくわん）に気がつき、頭を悩なやましたようだった。あらゆる試みが、あらゆる方法が、あらゆる説得が、私に向かつてなされた。私はやせ衰えおとしろ、挙げ句の果て骨と皮だけの姿に変わって死んでゆくはずだった。だがそれでもよかった。他の命をうばうことによつて生き永らえることは私には出来なかった。

天国で花の精と遊ぼう、草の精と遊ぼう。そこでは何も食べなくて生きて行くことが出来るのだ。死の影像が夜しばしば私を訪れるのだった。^⑦青白い暗い死の影像が……

私は床の一点をじっと見つめていた。そこでついいま蜂が殺されたのだった。だがきれいに取り片づけられた現在、その一点にはもはや何の痕跡も残っていなかった。油が切れてほこりで白い、一時の打水で^{さんじ}暫時の間うるおった、^⑧変わりばえのしない古バスの床の単なる一点でしかないのだった。

私は固定観念を^{おそ}惧れていた、幼年時代のあの恐怖に似た——。さっきの殺された蜂がよもや私に固定観念の影を落とそうとは思われなかったが、しかし決してもたらさないと断定出来なかった。私は己の精神の生理を知悉^{※ちしつ}していた。そして漁師に嵐の襲来^{あらし}が分かると同じ程度に、ある種の強迫観念の襲来が私には予感出来るのだった。固定観念のもたらす不思議な業苦を私は恐怖していた。それは

私にある奇怪な靈感の生理を付加するが、同時に容赦なく私の幸福を、やわらぎをうばい去って行くのが常である。

——思いついたようにふっと私は腕時計を見た。発車の時刻だった。長針が十分過ぎを指していた。

(^{かしわばらひようぞう}柏原兵三「蜂の挿話」より・一部改)

※拇指……親指のこと。

※挺身……身を投げ出し、人に先んじて事にあたること。

※僭越……自分の身分や資格をこえて、出過ぎたことをするさま。

※躊躇……あれこれ迷って決心できないこと。ためらうこと。

※痙攣……筋肉が自然にひきつること。また、それにともなうふるえ。

※ボパイ……アメリカの漫画映画のキャラクター。

※知悉……細かい点まで知りつくしていること。

問一 — a「ほご」・ — b「ふき」・ — c「ゆだ」・ — d「お」を、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 — ①「私は待ちに待った味方を得たような安堵の気持ちを味わった」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 二人連れのどちらかが蜂を殺して、刺される恐怖から解放してくれるかもしれないから。
イ 二人連れが蜂を追いつくことにより、車内の危険を取り除いてくれるかもしれないから。
ウ 二人連れのほうに蜂の標的が移動して、自分は蜂の攻撃を避けられるかもしれないから。
エ 一人では困難であっても三人で協力することにより、蜂を撃退できるかもしれないから。

問三 — ②「人のよい当惑」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 男はこれまで蜂に刺されたことがないので恐ろしいと思っていないということ。
イ 男は蜂が自分たちを攻撃してくることはないと思観的に考えているということ。
ウ 男は女が蜂を怖がらなくて済むようにおだやかな表情を作っているということ。
エ 男は蜂を危険だと思っているが自分から何かしようという気はないということ。

問四

③「男は両手で顔をおおった」・④「私は目をつむった」とありますが、女が蜂を殺したとき、二人は似たような行動をしているものの、その意味するところは異なっています。そのちがいについて説明したものととして、適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ③の瞬間では、男は女が蜂を殺すことを予感し、おびえているが、「私」は女が蜂を殺すこと自体にはそれほど恐怖を感じていない。

イ ③から④まで、男は女が蜂を殺すさまを見ないようにしているが、「私」は女の行動を観察し、その心理について考察している。

ウ ④の瞬間では、「私」は過去の記憶がよみがえることを恐れているが、男はすぐ目の前の残酷な出来事が終わったことを願っている。

エ ④の直後には、二人とも蜂を見ているが、男は結局何もしていない蜂に同情し、「私」は過去に刺された体験から蜂をにくんでいる。

問五

⑤「人間の魂の操作はひどく勝手なものである」とありますが、「ひどく勝手」とされる「魂の操作」の例として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 夏休みは多くの時間があるが、細かく計画を立てないと効率的に勉強ができない。

イ 短距離走とマラソンであれば、距離の長いマラソンのほうが心理的負担が大きい。
たんきよりそう

ウ メールやメッセージアプリを使うと、面と向かって言えないようなことが言える。

エ 直接ふれると危険な薬品でも、手袋やピンセットを用いれば問題なくあつかえる。

問六

⑥「天国で花の精と遊ぼう、草の精と遊ぼう」とありますが、なぜ動物の精はここに加われないのですか。二十字以内で説明しなさい。

問七 — ⑦「青白い」とありますが、「青」や「白」という語を用いた次の(1)から(3)の言葉の意味をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (1) 青写真 (2) 白眼視 (3) 青天白日

- ア 美しい景色。
イ 未来の計画。
ウ 若者の様子。
エ 心あたたまる思い出。
オ 無実だとわかること。
カ 人に冷たく接すること。
キ 新しい観点で見ること。
ク 物事の本質を見失うこと。
ケ 広々としてさびしいさま。

問八 — ⑧「変わりばえのしない古バスの床の単なる一点でしかない」とありますが、その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 「私」にとっては蜂が殺された「一点」として重要であったが、蜂を殺した女をふくめて、誰にとっても特別な「一点」として認識されない。
イ 人間に比べると蜂は「一点」として表現されるほど小さな存在であり、たとえ殺されたとしても「私」たちに対して何の影響ももたらさない。
ウ 木でできた古バスの床は蜂が殺されたことでこれが付着したものの、それは「一点」と表現されるほど小さいので乗客は見過ごしてしまふ。
エ 蜂が殺されたのは古バスの「一点」だが、このような「一点」は無数に存在し、すべての人間はそのあとをふみつけ苦しみながら生きていく。

問九 — X「偏執観念」・ — Y「固定観念」・ — Z「強迫観念」とありますが、本文中のこれらの言葉について〈あずさ〉と〈さなえ〉が話し合っています。以下の会話をよく読んで、後の問いに答えなさい。

〈あずさ〉 固定観念という言葉が辞書で調べてみたら、「いつも頭から離れないで、その人の思考を拘束する考え」という意味だったのだけれど……。この作品ではどういうことを意味しているのかな。その前後で — X「偏執観念」や — Z「強迫観念」という表現が使われているけれど、ちがいはあるのかな。

〈さなえ〉 「強迫観念」は「ある種の」とあるから「私」もまだ具体的にわかっていないんだね。「私」が苦しめられたり、恐れたりしている「偏執観念」と — Y「固定観念」のちがいを考えてみようよ。……あつ、よく読んでみて。

〈あずさ〉 ほんとうだ。気づかなかったよ。「幼年時代のあの恐怖に似た」とあることから、それがわかるね。

〈さなえ〉 そうそう。ところで「偏執観念」は、この作品ではどのようなことを意味していると思う？

〈あずさ〉 ええつと……簡単に言えば、食べるためであつても他の生き物の生命をうばつてはいけない、ということになるかな。それで「私」は苦しんでいたんだよね。

〈さなえ〉 うん。でも結局「私」は生きることを選択したんだ。しばらくは他の生き物の生命をうばう罪悪感をかえつづけていたんだろうね。

〈あずさ〉 結構重い話だね……。

〈さなえ〉 そうだね。そしておそらく「私」は、そういった「偏執観念」をなんとか乗りこえたからこそ、いま、こうして生きているんだ。けれど、このバスでの出来事を通じて、 — Yで示される「固定観念」が新たに生まれそうになっているんだね。女が蜂の生命をうばった理由を「私」はどう考えているかな？

〈あずさ〉 なるほど。ここで「私」は「偏執観念」から一歩すすんだ「固定観念」による苦しみ、つまり、2 という苦しみを恐れているんだね。

〈さなえ〉 そういうこと。細かい表現や前後の展開に注意することで、面白く小説が読めるね。

(1)

1

にあてはまるものとして、最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 「偏執観念」と「固定観念」とでは辞書的な意味がちがっているし、異なった文脈で使われているから、全く別のものとして考えるべきなんだ

イ 「固定観念」という表現が何度か使われているのに、「偏執観念」は一度だけだから、「偏執観念」は「固定観念」をまとめているんだろうね

ウ 「偏執観念」は「私」の過去に関わることだけれど、「固定観念」はこれからのことを指しているから、同じ「観念」でもちがいがあるとはね

エ 「固定観念」というのは多くの人が抱いている考えのかたよりを表しているから、「私」個人の「偏執観念」とはちがった意味になってくるね

(2)

《あずさ》と《さなえ》の会話文全体をふまえ、

2

にあてはまる内容を四十六字以上六十字以内で書きなさい。

〔以下余白〕

国語解答用紙

〈R05142064〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

という苦しみ……

〈R05142064〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

国採点
語欄

問九 2	問九 1	問八	問七	問六

折り線

二

問四・五	問二・三	問一	問十

二

問四	問二	問一
		a
		b
		c
		d

問九

問十	問九

問八	問七	問四・五・六

問八	問七	問四
	A	
	B	

という状況。

問三	問二	問一
		a
		b
		c
		d

一

一